



碧南ロータリークラブ週報

第2410回例会 平成20年5月21(水)

● 会長 鈴木 敏弘 ● 幹事 石橋 嘉彦 ● 会場監督 新美 宗和 (SAA)

■ 例会日 毎週水曜日 12:30

■ 例会場 碧南商工会議所ホール

■ 事務局 碧南商工会議所内

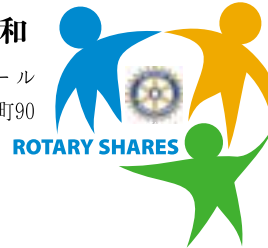
〒447-8501 愛知県碧南市源氏神明町90

TEL<0566>41-1100 FAX<0566>48-1100

ホームページ: <http://www.hekinan-rc.jp/>

E-mail: info@hekinan-rc.jp

■ 会報委員 新美 惣英・長田 和徳・平岩 辰之・杉田 茂



2007~2008年度
国際ロータリーのテーマ

ロータリーは
分かち合いの心

● 斉 唱

ロータリーソング 「今日も楽し」

● 本日のメニュー

和風弁当 大正館

● 本日のお客様

卓話講師 鶴ヶ崎区山車保存会 会長 板倉 昭正様



鈴木 敏弘会長

会 長 挨拶

ミャンマーのサイクロン、そして先週の中国四川省の大地震、今までの災害では考えられない大きな災害が起きた為に、このような大きな被害が出たと思われれます。地球は今後もっともっと大きな災害が起きるのではないかと心配でなりません。いずれにしましても、ミャンマー、中国の被災にあわれました方々に哀悼の意とお見舞い申し上げます。

今日はちょっと趣を代えさせて頂き、矢作川が長い年月によって、地元碧南の地形の変形を簡略に話させて頂きます。

矢作川は自然に出来た川で、室町時代の終わり頃まで堤防らしいものは築かれなかった。1452年頃、治水が目的でなかったが岡崎城の西、矢作川左岸にわずかな堤防が築かれた。

本格的な堤防が築かれるようになったのは、1509年頃からである。徳川家康が秀吉の命により、関東へ移った後、岡崎城主になった田中吉政が碧海額田郡地内の矢作川西岸に一連堤を築いたという。これが矢作川の治水の始まりであります。しかし、堤防を築けば洪水によって、堤防が決壊することもあり、人と水との闘いが始まるのであります。

矢作川は、碧海郡藤井村（現在の安城市藤井町）で碧海の台地の東側に突き当たり、左に大きくカーブし、大郷山とか、八ッ面山を湾曲しながら、平野部へ流れている為、西尾城下は洪水の常習地帯であったようである。その対策として考えられたのが、別の放水路を開削する事であった。

1603年、幕府は米津清勝を奉行として、藤井村から米津村の間、1310mを開削し、川幅36.3m、深さ7.2mで米津より矢作川本流の水を海へ落とすものであった。

この矢作新川の開削は西三河の海岸地域の地形を変えることになった。米津以南の海は矢作川の運ぶ土砂によって埋め立てられ、1605年米津から鷺塚までの3.2kmの間は陸続きになってしまった。

そこで1644年に堤防が築かれると、城ヶ入、根崎、東端の海岸線は干し上がって陸地となったのであります。

しかし、この一部が湖沼となって残ったのが油ヶ淵であります。1663年鷺塚から下流域の棚尾の海岸が干拓され、平七新田が造成され、これをきっかけにその東面が1666年江戸の商人、伏見

屋又兵衛により干拓され、伏見屋又兵衛により干拓され伏見屋新田と名付けられた。

続いて、1746年には、伏見屋外新田が開かれ、いずれも商人の手によって進められました。1827年に大浜、棚尾村の村民により、前浜新田が造成されました。

その後、戦後に入り、川口地区の干拓が造成され、矢作川右岸の最後の干拓事業となったのであります。

一方左岸の西尾側もありますが、本日はこれにてご挨拶に代えさせていただきます。

「永坂隆一氏を偲ぶ会」会葬御礼の挨拶

御子息 永坂 誠司氏



石橋嘉彦幹事

幹事報告

・他クラブの例会変更等は、幹事報告書の通りです。

委員会報告

〈出席奨励委員会〉

総会員数79名(内出席免除者11名の内出席者7名)出席者59名

出席対象者 59/75名 出席率 78.67%

欠席者20名(病欠者0名) 前々回修正出席率 97.44%

〈ニコボックス委員会〉

※三週連続出席率100%の場合は記念品を差し上げます。

長田 昌昇君 チョットチョットです。

小笠原良治君 5月17日好天に恵まれ、第2回ふれあい田んぼアートを実施しました。今年のテーマは宝船です。当日は多くの一般参加者の協力と努力の結果、無事田植えができました。日々の成長が楽しみです。是非皆様も一度はご鑑賞下さい。収穫は9月27日です。今週末にうれしい事があります。

鶴田 光久君 本日の卓話講師、鶴ヶ崎山車保存会会長 板倉昭正様を紹介させていただきます。

杉浦 昌裕君 亀山裕一様に楽しませていただきました。

角谷 信二君 杉浦健次さんにお世話になりました。

榊原 健君 先週日曜日、中日新聞杯少年サッカー大会が無事終了しました。

栗津 康之君 おかげ様で、弊社も創立60周年を迎えることができました。これよりもご指導ご鞭撻の程よろしくお願い申し上げます。

卓話

鶴ヶ崎区山車平成修復完成記念行事開催にあたり「山車大修復四方山話」

鶴ヶ崎区山車保存会 会長 板倉昭正様

みなさん こんにちは。

ロータリークラブの例会に、お招き頂きありがとうございます。

平成17年の万博の時にも、万博会場で山車がどのような状態で展示されているのかを含めて、山車についてお話しをした憶えがあります。

さて、約20年間かけて修理してまいりました山車が完成したということで、今月の25日(日曜日)に鶴ヶ崎にて、広く皆様にお披露目を致しますので、立派になった姿を見て頂きたいと思っております。

そのような中で、鶴ヶ崎の山車のパネルを作ってきました。これが今回新しくなりました山車の全景でございます。

この鶴ヶ崎の山車は、「亀崎の東組宮本車」という山車の名前が昔の名前でした。それを元治



元年（1864年）に鶴ヶ崎祭礼講中が包金にて譲り受けました。その当時、いくらで譲り受けたのか分かりません。

大浜中区の山車は、亀崎の中切という所から包金が金三両で買われたと聞いております。この中区の山車は、鶴ヶ崎の山車よりも50年前に購入されました。

今、碧南にある山車の中で一番古いのは、大浜上区の熊野神社に少しバラバラになっている山車です。これは、亀崎の石橋組の残骸で一番古い物であります。すでに二百年以上は経っていると思います。

次に金箔又は彩色がしてあるという山車は、亀崎の前期の形だといわれています。

現在は、亀崎地区も含めて半田全部の地区の山車が、白木造りの彫刻がしてあります。これは、江戸時代には有名な方で、幕府の御用もされていたという、立川流立川一族の中の立川という方が、たまたまこの知多半島にやって来られ、山車の彫刻をするようになったという事がございます。その始まりが、今の半田地区の山車が白木造りに変わっていったということです。

私どもの「玉車」は、正面の中心に「卷龍」が彫り上げられています。これは尾張藩主御用彫師の六代目早瀬長兵衛吉政という尾張きっての大彫刻師が構図も大胆に彫り上げています。又、上山全体の彫刻は、名古屋の瀬川治助重定が担当されて制作されたものであります。そして、山車全体の形を造り出したのが、宮大工の岸幕一族だと思われれます。阿久比の方に昔から宮大工さんが多くおりまして、その方達が山車を造るようになったそうです。その宮大工の中の岸幕という方の一族が主体になって山車そのものを造るようになり、装飾を早瀬長兵衛や瀬川治助といった人達が彫刻されて、綺麗な物に仕上げられていった訳でございます。

鶴ヶ崎の山車は、特に龍がたくさん付いております。そして、幕については、龍の手に持っている宝珠玉を描いて、全体バランスを取られたということで、これほど大変バランスの良い形の山車はないと言われております。

そのような中で、平成元年の修復が始まったわけでございます。その前に、昭和51年の時に42歳の厄年の方達から祭礼になぜ山車を出さないのかと問い合わせがありましたが、車輪が痛んでいて倉庫より出す事が出来ない状態でありました。それを聞いた厄年の方達から車輪を寄進して頂き、昭和51年から山車が連続して祭礼に出ております。山車引きを始めた時に、山車を動かしますと上の部分が「ガタガタ」と揺れ動き、彫刻のニカワが緩んで取れてしまう事が起きてしましまして、それを直さないといけないという事から、今回の修復が始まったという事です。

平成元年に保存会を立ち上げまして、市の有形文化財に指定され、補助金と区民のご寄附をお願いしてきたわけでございます。これにより、修理を山車の下から順に段階をふんで修復をしてきました。平成18年に修理そのものが全体的に終わったという感じでありました。

私どもが、愛知万博に山車を持っていった時に、万博会場の中で知り合いました中国人の周さんという方が、非常に刺繍に詳しい方でして、その方は日本の美術大学に長年学んでおられて、現在は大連の国立大学の助教授をなされておられます。この方は、デザインを専攻し、刺繍に詳しく、万博会場にて色々話しをしているうちに、幕を作る話しをしておりましたら、幕なら中国で作れますよという話しになりました。

しかし、以前、半田地方の下半田で幕の刺繍を中国で作られると言う事で、あまり刺繍に詳しくない人の経由で作られた事がありました。その時には、正直言って誰が見ても上手く絵柄がのっていないような刺繍が出来上がって来たということで余り良い話を聞いておりませんでした。

今回、一応万博で知り合ったとはいえ、その周さんに本当にお願ひして良いものかと一つ考えまして、まず手始めに山車の二階の追幕を作って頂くことをお願いして、よければ次に大幕を作って頂こうともくろみました。

出来上がってきた追幕が非常に良かったし、又費用が普通で考えると四百から五百万円位かか

と思っていたところ、最終的にサービスということで20万円で作って頂きました。

実際に中国の蘇州では、給料が月1万円から2万円位であります。しかし、工数を考えますと赤字覚悟でやって頂いたと思います。そのような事もあり、大幕もお願いすることになりました。

私たちは、刺繍というものは大変難しいものだと思っておりました。

蘇州では、刺繍専門工場がたくさんありまして、表と裏の絵柄が違う刺繍をする所はたくさんあります。仕事は本当に手際は良いです。

ここで、私達は見積りを取ってなんとしても安く上げたいという気持ちがありましたので、周さんともよく相談しながら見積りをとらせて頂きました。しかし、なかなか見積もりは出してこなかったです。相手はとにかく作らせて欲しいし、損はさせないということでした。それでは、参考となる仮の見積りを出して頂くことになりました。

一応、大幕3枚、水引幕3枚、七五三の金刺繍3枚、しめ縄3枚等の見積りが出まして、当初450万円の見積りを出してきました。

16年前に鶴ヶ崎地区で新川町制100年祭という催し物を区で開催した事がありました。その時、亀崎の東組の山車を鶴ヶ崎に持って来て頂きまして、兄弟山車引き揃えを行ないました。一緒に来られた名古屋の刺繍屋さんとか、幕や緞帳等を作っている会社経由で、京都で見積りを取って頂きましたら、1900万円の見積りが出ました。

日本ではこれくらいかかるとは思っておりましたが、1900万円は高いなと思いました。

我々が生きている間には、幕は出来ないと思いました。

今回、中国の周さん経由で450万円という安い見積りが出て来ました。実際には当人の渡航費用もありますし、輸送費もかかりますし、金具等も入れて最終600万円で作成したわけです。

日本では、1900万円が高いとは思いましたが、中国の方達から見ると600万円が非常に高いと思われていると思います。

しかし、私達はこの600万円という金額の安さに驚きました。又、素晴らしく正確に刺繍を作って頂きました。

周さんには大変敬意をはらっております。これは、本当に鶴ヶ崎の古い幕から下絵を作りまして、その下絵を現在の幕の大きさに合わせて拡大をして、それを一枚の大きな幕と同じ大きさの下絵を描いて、それを中国に持って行って、それに合わせて刺繍をして頂いたということです。

刺繍作業を見ていると大変おもしろいものであります。

刺繍は、始めに枠を組んでまして、その真中に少し穴が開いているわけです。手の届く所は、上から刺繍の針を落としていくと下から今度は上がってくるんです。なんで下から上がってくるのかなと思ってましたら、下にもぐっておって、すぐに折り返して上に針を上げてくるわけです。その正確さに驚きました。又、作業も早いです。

今回、刺繍工房を見学させて頂き、安心して帰ることが出来たわけでございます。

私達を中国に行かせて頂いて、刺繍製作の現場を見る事ができて、立派な物が出来上がり本当にありがたく思っております。

鶴ヶ崎区民の皆様には、このパネルの絵も見ておりません。今日、ここのロータリー会場へ初めて持って来たわけでございます。

この完成した山車を25日の日曜日に区民の皆様にご披露する予定でございます。

日曜日には、天気が良くなることを願っているわけですが、その時には区民の皆様に見て頂き本当に良かったと思って頂けるように、我々も山車の修復に一生懸命になって今日まで対応してまいりました。

そのようなことで、「山車修復」についての話を終わります。

本日はこのような席にお呼び頂き、感謝申し上げます。

25日、日曜日にはお暇がございましたら、是非、見に来て頂きたいとお願い致します。本日は
どうもありがとうございました。

次回例会案内 平成20年6月4日(水)
『東海地域における古墳時代の環境』
パリノ・サーヴェイ株式会社
取締役 調査研究部長 橋本真紀夫氏